

林業の村から発信する ネットワーク型産直住宅

矢房孝広

諸塚村役場企画課長補佐

都市と山村がつながり、施主と林業家がつながり、まちづくりと産直住宅がつながる。そんなつながり＝ネットワークから生まれる九州の産直住宅の取り組みが進められている。

環境共生の村から

九州山脈のほぼ中央に森深き山村・宮崎県諸塚村はある。村土の95%を占める山林は主に、スギ、ヒノキの針葉樹とクスギ、ナラの広葉樹の混交林である。決して都市とのアクセスに恵まれているとは言えないが、そのモザイク林相と呼ばれる環境にやさしい美しい森を生かし、都市と交流しながら山と共生する「全村森林公園化構想」を村づくりの柱にしている。

諸塚村が、森林組合等と共同でプロジェクトチームを組み、ネットワークによる製材品供給方式の産直住宅に本格的に取り組んだのは平成8年で、建築業界とのつながりの弱い小さな山村の無謀な試みながら、強力なネットワークに恵まれ、独自路線を地道に進め、平成13年度末で通算42棟の実績を積み上げている。

諸塚村方式産直住宅のスタンス

私たちのスタンスは、環境にやさしいことが第一である。「自分のことだけでなくお互いのことを、現在のことでなく子や孫の代のことを」考えて守られてきた美しい森の資源を壊さず守ることが目的で、その精神を産直住宅だけでなく、村づくりのなかにも生かそうという「エコビレッジ諸塚プロジェクト」を同時に立ち上げている。

第二に、地域にあるものを生かした家づくりを目指すことである。「あれがない」「これがない」とできない理由を探し、ないものねだりして自らの文化にない借り物競争をすることをやめ、地域にある資源を生かすシステムを創ることを評価する。

第三に、一過性でなく、関係を継続していくことを大事にする。人口減少、超高齢社会など、山村は非常に厳しい局面に立たされているが、人口増加の幻想を追うよりも、村に残り村を支える林業家の自信と活力を支える動きを重要視する。産直住宅によって、

生産者とユーザーが、お互いの顔が見え、安心と信頼が得られる流通が可能になり、それが生産者の自信にもつながる。家を建てて終わりではなく、それから始まる関係を大事にしたい。

木材産地ツアーでの見学風景



諸塚村



九州限定の産直住宅

諸塚村産直住宅は、九州限定としている。産直住宅の三つのスタンスをもとに、無駄な輸送エネルギーを使わないこと、地域の家は地域の木材を使うべきであるという身土不二の考え、そして施主の顔が見える範囲を供給限度とした結果である。「九州の家は九州の木で」がキャッチコピーで、この考えを街と共有できることを願う。

産直住宅からエコツーリズムへ

産直住宅は、都市と山村との木材という地域資源の交流から人と心の交流につながることを大いに期待している。自分たちの精神的支柱である森林資源を生かしながら、経済面だけでなく、精神面、活方面でプラスになるシステムの構築を狙う。

ネットワークによるプロジェクトの展開で、セミナーやツアーなど山村から情報発信する機会が増えた。街から木材産地を訪れ、木材生産現場を見学し、村の人々と文化に触れる木材産地ツアーは、すでに通算25回、延参加者1,000人を数える。また、諸塚の古い民家を移築せず固有の地で改修した体験交流型宿泊施設「森の古民家」を活用し、年間10回以上エコツアーを実施するなど「エコビレッジ諸塚プロジェクト」は、文化的なものや人的なものを含めた地域の資源を活用したエコツーリズムへと発展し始めている。

このような都市との交流をきっかけにして、これまで営々と受け継がれてきた山村文化があらためて再評価される機会ができ、村民に大きな自信が生まれつつある。

家づくりに取り組む林業家を目指す

近年山へ向かう建築家が決して珍しくなくなってきた一方で、都市と向かい合おうという林業家はまだまだ少ない。「林業家は、木材に自信がないからあまり木のことを語らない」と言われる建築家の方がいるが、大変な誤解である。半世紀ものあいだ手塩にかけて育てた木材に自信がないはずがないではないか。長年市場の言われるままに右往左往してきた習慣を脱し切れていないことと、語るべき言葉をまだ知らないだけである。

ネットワークによる産直住宅での経験と建築家たちの良きアドバイスによって、近い将来建築現場を堂々と闊歩する九州の林業家が当たり前に見られるようになることを私は確信する。

やぶさたかひる

1962年宮崎県諸塚村生まれ/九州大学卒業/

1995年諸塚村役場入庁/エコミュージアムもろつか館長兼任